



Title	ハワイ社会における開教使夫婦の役割の変容：日系宗教の教団制度のアメリカ化に着目して
Author(s)	横井, 桃子
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2018, 44, p. 101-119
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/68293
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ハワイ社会における開教使夫婦の役割の変容

ー日系宗教の教団制度のアメリカ化に着目してー

横 井 桃 子

目 次

1. はじめに
2. ハワイ開教の背景と展開
3. 開教初期の「開教使の妻」の分析
4. 現代の開教使の配偶者の役割
5. まとめ

ハワイ社会における開教使夫婦の役割の変容 —日系宗教の教団制度のアメリカ化に着目して—

横 井 桃 子

1. はじめに

1959年にアメリカ合衆国の50番目の州として認められたハワイ州には、現在136万人以上が暮らす。ハワイというと、年間約698万人が観光客として訪れる現在世界有数のリゾート地という認識が一般的だろうが、しかしハワイ州はアメリカ合衆国のなかでももっともエスニック文化が際立つ地域である。

ハワイ州内の人種構成をみると、白人は少なく(24.7%)、アジア系が38.6%と多数派で、また混血が23.6%と多い。アジア系の内訳をしてみると、日系人は13.6%、約18.5万人とフィリピン系(14.6%)に次いで多い(Mutual Publishing 2012)。日系人が多いことから仏教徒も州の全人口のうち約8%と他州と比べ多く(Pew Research Center 2014)、郊外には日本由来の寺院や神社が点在している。日系宗教でも最大宗派とされる浄土真宗本願寺派(ハワイにおいては“本派本願寺 Honpa-Hongwanji”が正式名称である)の寺院は、別院を含め33がハワイ州の各地に存立している。

では、教えを伝えていく僧侶はどのくらいハワイにいるのだろうか。本派本願寺ハワイ開教区においては、日本国外への仏教・浄土真宗の布教をはかるといって派遣される僧侶のことを「開教使」と呼び、2016年現在では26名の開教使が日々布教伝道につとめている(浄土真宗本願寺派 2016)。本派本願寺ハワイ教団の開教使は、日本国内の真宗僧侶と変わりなく、有髪や肉食妻帯もちろん教団の制度として認められている。当然、日本の真宗僧侶同様に、結婚を考える開教使は多くいる。日本の真宗寺院においては住職の配偶者＝坊守の寺院運営へのコミットは非常に重要であると考えられているし、寺族規程という制度の上でも、周囲のひとびとからも、寺院活動にかかわることが期待されている。ではハワイにおいて開教使とともに生活を送る配偶者は、ハワイでの布教伝道等の寺院活動についてどのように考えているのだろうか。本稿では開教初期の開教使とその妻の日系移民コミュニティでのはたらきを当時の手記などから明らかにした後で、現在の開教使家族に対するインタビュー調査の結果と比較しながら、その役割の変容を検討する。

2. ハワイ開教の背景と展開

2-1. ハワイを対象とした研究の意義

19世紀末から20世紀初頭に向け、多くの日系宗教教団がハワイへの布教に乗り出した。プランテーション農園という一大産業が生み出した日系移民社会と密接に関連してきた日系宗教は、ネイティヴ・ハワイアン文化とキリスト教文化が融合した異文化環境のなかで、その制度や文化を変容させつつ定着してきた経緯がある。たとえば日系仏教の盆踊りという宗教文化がボン・ダンス (Bon dance) としてハワイの一大イベントになっていることは、ハワイ社会へと溶け込もうと努力し変容していった結果であると言える。こうした現地化した宗教文化は、開教使家族の価値観や行動とも無関係ではないはずである。ホスト社会への同化の要請が強く「白人伝道」に重きを置いていたアメリカ本土での布教 (森岡 1978) と異なり、ハワイ社会では多文化主義的価値観のうえに移民社会が成り立っていたことから、日本仏教の要素を残したエスニックな宗教文化が育まれた。また、ハワイの開教使とその家族は、近年そのエスニシティは多様化しているものの、未だに日本から派遣されてくる開教使も少なくないという点で、日本という本派本願寺のホームランドとつながりが保たれていることが指摘されている (高橋 2014)。ハワイにおいては日系移民文化がローカライズされ定着しているという点で特徴的であり、この日系移民を主導してきたハワイの宗教指導者＝開教使を対象として研究することには一定の意義があると考えられる。

2-2. ハワイの日系宗教の歴史¹⁾

1868年に「元年者」と呼ばれる153名の日本人が「サイオート号」に乗ってハワイへやってきたのが日本人移民の歴史の始まりであるが、それから日本政府主導による官約移民が開始される1885年までの約20年間、日本宗教のハワイ布教への動きは見られなかった。

日本仏教のハワイの日本人移民に対する布教の最も古いものは、1889年の浄土真宗の僧侶・曜日蒼竜によるものである。しかし曜日は教団の開教使という立場ではなく、個人的な心情に突き動かされ単身でハワイに渡り布教をおこなっていた。いわゆる非公式な海外布教であった。曜日は積極的にハワイでの布教伝道をおこない、帰国後本願寺派教団に対しハワイ布教のための援助を要請するに至っている。

1897年に正式にハワイ布教を開始した本派本願寺は、1899年に今村恵猛がハワイに来任し、開教監督に就任する。今村はハワイ仏教界を主導するのみならず、日系移民社会をも代表する人物として活躍した (Kimura 1988)。まず今村は、本山からの支援が非常に少なく布教活動に困窮する本派本願寺ハワイ教団において、独立自給の方法を講じるため、様々な面でアメリカ化を推進していった。仏教青年会や仏教婦人会、日本語学校といったコミュニティ機能を発展させるとともに、仏典の英訳や日系2世僧侶の育

成、日系人以外の多人種への布教を積極的におこなっていったことが特徴である（高橋 2014）。さらに、ハワイの移民社会においては日本の檀家制度がなじまないこと、そしてアメリカ式の宗教制度に従う必要があることから、1923 年には開教使のみの教団運営体制から信者代表を含めた議制会へと組織改革をおこなった。本派本願寺ハワイ教団は今現在もこの議制会を採用しており、信徒を中心に構成される理事会（board）が実質的決定機関の役割を果たしている。聖職者中心から信徒中心の教団支配への移行（中野 1981）は、アメリカ社会において日本仏教が定着するために必要なことであったと考えられる。

2-3. 近現代の本派本願寺の概況

上述してきたように、ハワイのホスト社会に適応していくために日系宗教もアメリカ化のプロセスを経ていったのだが、アメリカ本土と比較すると幾分緩やかなアメリカ化であったようで、日本の一般寺院にやや近い性格のエスニック・チャーチの様相を呈していた。日系移民の宗教的救済を提供するとともに、エスニック・アイデンティティの資源を提供する重要な役割を果たしていた日系仏教は、戦後の復興期以降においては、信仰継承について厳しい状況に置かれることとなった。戦後、日米関係の好転によってハワイ社会全体のリベラル化が進み、日系「アメリカ」人たちの社会的地位は向上していった。一方で、これまでの親子間の信仰継承を中心とした日本仏教の形態では、そうした次世代の日系アメリカ人への布教伝道は不可能なのではという危機意識に対し、ハワイ教団はデノミネーション化を目指した。しかし近年の教勢を見てみても、世代交代による信仰継承の断絶や信者側のニーズの変化、社会趨勢への対応の遅れからハワイ布教の停滞が起こっていることは明らかである。

一部を除きほぼすべての日系宗教において、主要な信者の人種は日系人で占められており、そうした教団においては 3 世代以降の日系宗教離れが共通の課題として挙げられている（井上 1985、高橋 2014）。本派本願寺について見てみると、浄土宗総合研究所が 1993～1994 年におこなった浄土宗ハワイ開教研究調査においては、本派本願寺のメンバー数は 2500 世帯で、65 歳以上の日系 2 世・3 世が中心であるということが明らかにされている（開教（海外布教）研究班 2000）。うち白人信者は約 100 人と言われており、やはり日系人を中心としたエスニック・チャーチの性格特徴をもっている。さらに 2007 年に高橋がおこなった聞き取り調査においては、護持会員は約 8000 人と示されている（高橋 2014）。一家の代表が護持会員になることから、20 世紀半ばごろまでは護持会員数はそのまま信者世帯数と数えることができた。しかし近年は次世代への信仰継承がうまく機能しないことが多く、実質的な信者は護持会員 1 人あるいは、その配偶者であることが多い。さらに 2016 年現在の統計データ（浄土真宗本願寺派 2016）においては、護持会員が 5108 人、信徒²⁾が 13000 人という結果が公表されている。同じく本願寺派教団の発表によれば、1986 年時点での護持会員数は 10216 人であった（浄土真宗本願寺

派 2016) ことから、この 30 年間で護持会員数は半減したことになる。

戦前の最盛期には約 10 万人(日系移民の総人口の 3 分の 2)の信者数(中嶋 1993)を誇っていた本派本願寺は、寺院数としても日系宗教のなかでトップであり、1941 年時点では 38 の寺院を擁していたという。2016 年時点での本派本願寺ハワイ教団の擁する寺院数は 31、別院は 2 となっており(浄土真宗本願寺派 2016)、そのなかでも開教使が住み込みで勤務せず近くの寺院と兼職している、いわゆる無住の寺院も少なくないことから、活発に活動している寺院は全盛期に比べて減少していると言えよう。ハワイ教団における実際の活動組織の数を見ても、フェローシップ(法話会)は 15 団体、日曜学校も 18 団体、各寺院の教化団体として仏教徒で構成される活動組織のうち最大規模を誇る仏教婦人会も 24 団体(メンバー数 1616 人)(浄土真宗本願寺派 2016)と、すべての寺院で仏教徒による活発な活動がおこなわれているわけではないようである。

本派本願寺に所属する開教使の人種を見てみると、2007 年時点の開教使 30 人の構成としては日本人 19 人、日系人 10 人、白人系 1 人と宗教者の面でもエスニック・チャーチの性格をあらわしている(高橋 2014)。今でも半分以上が日本からハワイに渡った日本人開教使で占められていることから分かる通り、(護持会員のほとんどはすでに日系 2 世・3 世など日系アメリカ人であることが多いにも関わらず)開教使のエスニシティという側面においては未だにハワイ教団と本山のあるホームランド＝日本との密接な関連があると言えよう(高橋 2014)。

2-4. 本派本願寺ハワイ教団の制度上の特徴

制度の上で日本の寺院の住職とハワイ教団の開教使が異なる点を上げるとすれば、以下の 3 点にまとめることができるだろう。まず、各寺院にメンバーを中心に構成された理事会(board)組織が存在する点である。理事会は第 2 代開教監督・今村恵猛によるアメリカ化の一環として、アメリカの法人制度に則って議制会を組織したことに始まる。理事会メンバーによって度々持たれる会議においては、寺院の年次計画や予算を話し合うだけでなく、寺院に配属された開教使の給与の決定がおこなわれるなど、日本寺院の総代会³⁾といった会議体よりもかなり強い諮問・意思決定の機能をもつ機関である。それゆえ、「開教使は、雇われマダムの振る舞わざるを得ないという意見(井上 1985)」も散見されるのである。

2 点目には、開教使の転任制がある。日本の真宗寺院は一般的に世襲制が多く、住職の子どもが次期住職となり、そのまた子どもが将来的に住職を継承していく、という形式がほとんどである。もちろん、新設された寺院や住職が不在の寺院に入寺するという僧侶もいるが、彼らはいったん入寺すればその寺院を離れることはまずほとんどない。しかし、ハワイの開教使は、寺院に「赴任する」という形をとり、理事会の任免決議やハワイ開教区総長の命によって各地の寺院を転々とする。3 年程度から長くて 10 年程度のスパンで転任をおこなうのが通例である。開教使の転任は開教初期から存在していた

ようだが、今なお定着している理由は説明されていない。開教初期は短い渡布期間で帰国してしまう開教使が多かったことや、キリスト教において転任の制度があったことがアメリカ化によって仏教寺院にも輸入されたこと、開教使の任免が理事会によって決定されるほどメンバーの発言力が強いことなどが考えられるが、定かではない。

3 点目に、ある程度の年齢になると退職する、リタイアの制度があることである。基本的に世襲制を採用する日本の真宗寺院の住職は、60 歳を過ぎても寺院運営や布教伝道の第一線で活躍することは少なくない⁴⁾。住職を次世代に継職させた後も前住職として寺院活動にかかわる者もいるし、自身の子どもが住職を継承すれば、前住職として寺院の庫裏＝自身が長く住んだ家に住まうことが可能である。こういったことから日本の真宗寺院においては「住職継職」に意識が向きがちで、「リタイア」という意識は薄い。一方でハワイの開教使はリタイアをすると、開教使として布教伝道にかかわることはほとんどなくなる。一メンバーとして日曜礼拝といった宗教活動に参加したりする程度である。

ここまで、ハワイ開教区における開教使を取り巻く制度について述べてきた。このようなハワイ開教区に特有の制度と制約のもとで生活を送る開教使について、日本の真宗寺院の住職とは異なる生活の様相が浮かび上がってきた。しかしこれらの制度に影響を受ける人物は開教使だけではないことに注意が必要であるだろう。すなわち、開教使の家族の暮らしぶりにも大小さまざまな影響があることが考えられる。次節では、開教使の配偶者に焦点を当て、とくに彼らの手記などをもとに開教初期の暮らしぶりを検討しておきたい。

3. 開教初期の「開教使の妻」の分析

3-1. 「開教使の妻」の存在と分析に用いる資料

多くの家族、そして多くの日本の寺院の住職と同じように、開教使はその配偶者や（未成年の）子どもたちと共に暮らすのであるが、「寺族」「坊守」という住職の家族や配偶者を指し示すような名称や規程は、現代の海外開教区の開教使の家族にはない。強いて言えば、男性開教使の妻を「開教使夫人」と表現する手記（貞包 2004）などが散見される程度である。このような曖昧な立場の開教使の配偶者は、日本の仏教寺院と同様に、寺院に住みながらも見えない存在とされがちである。数少ない開教使の妻の手記から、彼女らの存在がいかに初期のハワイ開教に影響を及ぼしていたのか検討しておきたい。

1914 年からハワイに渡り、90 余年の生涯のほとんどをハワイで過ごした菊池しげをの手記（菊池 1985）は、戦前から戦後のハワイ日系移民社会における本派本願寺の様子を現地の日本人女性の視点から知ることができる。また、1924 年には貞包好隆開教使と縫子夫妻がハワイに渡るが、貞包縫子が実姉や実父にあてた手紙をまとめたものが書籍として出版されている（貞包 2004）。縫子は 1927 年、ハワイに渡って 3 年もしないうちに逝去してしまうのだが、それまでの 3 年間のハワイでの開教生活を手紙から読み解い

ていきたい。

3-2. 開教初期の暮らしぶり

開教初期の暮らしぶりは、なかなか貧しかったようである。当時は客船で10日間かけて日本からハワイへ渡航するが、渡航費は非常に高額で借金するまでだったという。1924年5月にアメリカで新移民法が成立したため、日本人の移民は同年7月から全面禁止となる。移民の入管が禁止となる前かけこみ移民が殺到したため、同年6月にハワイへ渡った貞包夫妻だが、1等船室しか取れずに1名あたり600円の客室代がかかった⁵⁾。夫妻は渡航後その借金返済に悩むこととなった（貞包 2004）。

菊池や貞包の記録では、後述するように日本人移民の仏教徒や他の開教使夫妻との豊かな交流が描かれているが、菊池しげをは「どんなに生活費をきりつめても、社交費は増す一方で、借金はふえるばかり（菊池 1985）」と残し、貞包縫子は実父に金銭的援助を頼む手紙を送っている（貞包 2004）。具体的な金額は記載されていなかったが、菊池は「マウイ新聞社社長の安井さんが『奥さん、あなたが憎まれ者になって儉約して三ヶ年の内に借金を返さねば開教使さんでは駄目ですよ』と忠告され（菊池 1985）」るほどには困窮していたようであった。

さらに当時の布教の様子をみると、寺院近くの複数の日本人移民のキャンプに開教使は布教に出かけるのだが、布教の際に必要な交通機関は当時は馬であった。しかし貧乏生活せざるを得なかった菊池夫妻は、布教に欠かせない馬を「寺内に飼えない程の貧乏生活に追いやられて（菊池 1985）」菊池開教使は大変苦勞したのだと語っている。

金銭的に貧しい生活のなかでも、開教使夫妻の働きは非常に多忙であった。日系移民社会にとって日本語学校は重要な教育機関であり、仏教教団各派の寺院はこの日本語学校を擁していた。開教使やその妻たちは日本語学校⁶⁾の教師としてもはたらいていた。日本語学校の教師の給与はおそらく開教使家族の生活を支える重要な経済的資源であったのだろう。開教使はその合間を縫って各地に布教に出かけ、妻たちは来客の接待や雑事を引き受けていたのである。もちろん仏教婦人会や仏教青年会などの教化団体の指導も欠かすことのできない仕事であった。

3-3. 開教使夫妻のはたらき

菊池の手記では開教初期の布教伝道に注力する夫妻の様子が事細かに描かれている。この頃の特筆すべき点としては、菊池は自身のことを「開教使の妻」と表記していたが、「坊守」とも記していた点である（菊池 1985）。「坊守」は日本の真宗寺院の住職の配偶者の呼称であって、現在のハワイ教団で開教使の配偶者に使われる呼称ではない。しかし、開教初期の菊池をはじめとした開教使の妻は、自身を「坊守」であると認識していたのである。開教初期の開教使は全員が日本国から渡った日本人開教使であり、制度上もあまりアメリカ化が進んでいないこともあり、開教使家族の役割意識は寺院を護持する住

職家族とあまり違いがなかった可能性がある。

開教使の妻から見た開教使の日々の仕事ぶりは非常に多忙を極める様子であった。1915年頃の布教の様子を菊池は以下のように語っている。

当時のナアレフは寺院在地の他に布教区域が十三ヶ所のキャンプに分かれており、遠いところはお寺から十二、三マイル、近いところでも、二、三マイル離れていました。それらのキャンプを馬に乗って法要や布教に往復するのは大変なことでした。

これらのキャンプを主人は日本語学校の授業を済ませた後、牧場に放畜してある乗馬を連れ帰り、支度をして毎日のように布教に出かけたのでありました。(菊池 1985)

また開教使の妻である菊池しげを自身も次第に多忙を極めることとなる。先述したとおり開教使の妻は日本語学校の教師の仕事をするが多かったが、1920年11月に日本語学校の取り締まりを目的とした外国語学校取締法がハワイ領議会で成立し、教師資格などの条件が追加されてからは、日本語学校の教師の職を辞する者が出てきた。この教師の人材不足のフォローをするため、菊池しげをは近隣各地の日本語学校で教鞭をとることになる。当時は、自宅が遠方のため学校に通えない子どもや、知人の娘を嫁入り修行を教えるためとして、庫裏に預かっていたということもあり、目の回るような忙しさを以下のように綴っている。

お寺全体の運営上から、大変無理な日程を組まねばならなくなったのです。…＜中略＞…即ち朝早くホヌアボ校まで行って日本語を教えたあと、法話をし、讃仏歌をうたい、サンデースクールと同じようなプログラムをすませて、すぐ徒歩でヒイレア校まで行き、そこのプログラムをすませると村川先生の自動車の便をかりてナアレフに帰り、昼食もそこそこにして午後一時より三時まで裁縫を教え、それがすむと急いで夕飯の準備や、洗濯物などの家事の仕事をし、夕食後は二マイル以上もあるワイオヒヌまで、日本語学校教師資格試験のための英語の授業を受けに行ったのでした。この英語の勉強期間は主人が自動車で送り迎えしてくれましたが、法務や雑用もあって、私は三才の晃〔息子〕をつれて通学しました。(菊池 1985)

特筆すべきは、第二次世界大戦中の開教使の妻のはたらきである。開戦後すぐに在布日本人のうち日系移民社会の指導者的立ち位置にあった日本人宗教者などが数年に渡り抑留されるのだが、当時開教使であった菊池しげをの夫・智旭も他の開教使とともに突然抑留の身となった。残されたしげをは、被抑留者の家族とみなされ厳戒態勢の中の緊迫した生活を送ることになる。そうしたなかでも、日系移民たちの金銭的・情緒的な助け合いの様子が事細かに描かれているのだが、開教使不在となった寺院において、開教使の妻であるしげをが代わりに法務や日本語学校を取り仕切っていた⁷⁾ことが分かる記

述が見られる。またアメリカ軍の兵士として出兵した若い日系 2 世が戦死した際の葬式も、菊池しげをが葬儀を執行したとの描写がある。

アメリカ兵の戦死者がナアレフ本願寺の本堂で軍部と共に葬儀が営まれたのはこの時がはじめてでした。私は軍楽隊の吹奏の外に讃唱隊の讃仏歌をプログラムに加えておごそかに葬儀を執行させて頂きました。戦時中の四ヶ年間カウ郡の葬式の導師は私が勤めさせていただきました。(菊池 1985)

日本人移民を指導する立場であった日本人宗教者たちは、そのほとんどが戦時中は抑留の身となった。ほどなくして被抑留者はアメリカ大陸へ移送となり、被抑留者の家族である開教使の家族たちは抑留されている夫の近くにいるために移住する者も少なくなかった。友人知人がアメリカ大陸へ移住してしまうなかでも、菊池しげをはハワイを離れることはなく、不在の開教使の代わりに、寺院の住持や日本語学校の講師、残された日本人移民の世話などに奮闘していたのである。戦時中の開教活動は、開教使の妻の力に依るところが大きかったと考えられる。

3-4. 開教使夫妻と日本人移民コミュニティ

開教使の妻はその多くが寺院関係の日本語学校に勤め、また多くの日本人を接待するなどして、夫である開教使とともに日系移民のコミュニティに参与し維持してきた。貧しく多忙な暮らしのなかでも、開教使夫妻と信徒たちとの交流は非常にさかんであった。ときには日本人移民の家に招かれ、一方で開教使夫妻の住む庫裏にも信徒をはじめ様々な人を招き接待していた様子がうかがえる。特徴的なエピソードを取り上げてみよう。

ワイルクには立派なレストランはなかったので来客の食事などお寺で世話しました。食事の後片付けをしていると〔日本語〕学校の授業時間に間に合わないので、そのままにして出勤する事が重くなりました。ある日の事です。疲れ切って帰宅してみますと食卓などきれいに片付けて清掃がしてありました。後になって分かったのですが、江上たみ子夫人が…＜中略＞…わざわざ手伝いに来てくださっていたのです。…＜中略＞…そんなことが続きましたある日、隣の尾山医師の奥さんから「お風呂がわいています。お食事の用意もできていますからお二人〔開教使夫妻のこと〕でいらっしゃい」と親切な言葉をかけて頂き…＜後略＞(菊池 1985)

家事に手の回らない多忙な開教使夫妻に対して、周りの日本人移民たちが遠慮もない様子で住居に入り、世話を焼いている姿からも分かる通り、当時の庫裏は誰でも招き入れる自由な雰囲気的空間であった。各地の寺院を中心に形成される日系移民仏教徒のコミュニティ内の交流は、開教使夫婦にとっても心休まる時間であったようだ。もちろん

来客のおもてなしという点ではプライベートな空間を見られないようにという気苦労もあったようだが、日本人移民同士が助け合い、つながりを強めていく様子がうかがえるエピソードは数多く見られる。

でもナアレフはワイルク以上にお寺の仕事以外の雑用、例えば手紙の代筆、出生届、帰国の手続き、銀行預金の出し入れ等を依頼され、日本語学校の授業もあって結構忙しく、人間関係も親密でありました。(菊池 1985)

金庫も鍵のかかる入物もない私の家に、ひとびとは日本への送金や銀行への預金などを依頼して預けていかれることがしばしばありました。中には銀行の預金帳と実印を半年も一年も預け放しの人もありました。…＜中略＞…開教初期の開教使や坊守の仕事は、社会福祉関係の仕事、民生委員のような仕事や雑務がつぎつぎにありました。日常生活のなかでお念仏が生々としていました。(菊池 1985)

菊池開教使夫妻は、周囲の日本人移民たちからさまざまな援助を受けるだけでなく、日本人移民たちへの支援もおこなっていた。菊池しげをはこうした雑務を社会福祉関係や民生委員のような仕事と述べているが、手紙を代筆したり、銀行通帳を預かり送金手続きをしたりするといったエピソードからは、菊池開教使夫妻がいかに日本人移民から信頼されていたかが分かるだろう。

当時のハワイの移民社会は、エスニック集団内での結びつきが強く、日本人移民のネットワーク内での交流が盛んであった。日本人移民の多くが信仰する日本仏教と仏教寺院は、礼拝や年中行事や日本語学校、プライベートでの交流を通して、彼らのコミュニティ内の凝集性をより高める一助となったと考えられる。

ここまで、開教使とその配偶者の開教初期の役割やメンバーとの交流といった暮らしぶりを、手記などから明らかにしていった。開教初期の開教使の妻は多くが日本人であり、また日系移民コミュニティのメンバーも日本語を話す日系1世や2世が多かった。開教使はもちろん開教使の妻も、経済状況が厳しいなかで布教伝道だけでなく日系コミュニティのひとびとの支えとなるような活動に奔走している姿が見られた。そこでは異国の地に住む日本人という意識が根底にあり、移民社会の同類集団内のつながりが豊かな交流を生み、つながりをさらに強めていった。

現代のハワイ開教区の開教使家族は開教初期に比べ多様化してきている。日本人開教使だけでなく、日系2世以降の日系アメリカ人も開教使として布教伝道につとめるようになったし、日本人開教使と現地のアメリカ人の国際結婚も増加した。そうしたなかで、開教使家族の役割も大きく変化していることが考えられる。そこで次節以降は、開教使とその配偶者に対してインタビュー調査をおこない、彼らの人と人とのつながりや役割が開教初期と比較してどのように変容してきたかを検討する。

4. 現代の開教使の配偶者の役割

4-1. 調査の概要

対象となったフィールドは、ハワイ州のうちハワイ島とオアフ島に存立する各寺院である。ハワイ島には1つの別院と12の寺院、オアフ島には1つの別院と11の寺院、本派本願寺が擁する高等学校 **Pacific Buddhist Academy**、研究教育施設である **Buddhist Study Center** が存在する。戦後プランテーション農園が閉鎖され、それらに従事していた日系移民のコミュニティも次第に消失していった結果、プランテーション農園周辺に位置する寺院ではメンバーの数も次第に減少し、現在では開教使が住んでいない無住寺院となっている箇所も存在する。そういった寺院では、近隣（といっても車で30分程度かそれ以上かかるが）の寺院の開教使が世話をする、いわゆる寺院兼務の状態となる。ハワイ島にはこのような無住寺院が多く存在しており、ハワイ島に住む開教使のうち半数はヒロ別院に勤めている現状がある。オアフ島はハワイ州随一の都市・ホノルルを擁するだけに無住寺院は少ないが、やはり内地に行くにつれてメンバーは少なくなり、寺院運営が厳しい状況にあるようだ。こういった現状を踏まえながら、現代の開教使とその配偶者のコミュニティ参与に着目していきたい。

調査は2013年の9月～10月にハワイにおいて、11月に日本においておこなった。インフォーマントは14組21名の開教使および配偶者であった。いずれの調査も事前にアポイントメントを取り調査の同意を得た上で、インフォーマントの都合のよい時間に所属する寺院あるいは自宅に赴き、会議室あるいは居間でインタビューをおこなった。インタビューは著者単独でおこなった。なお、調査は大阪大学人間科学研究科社会系研究倫理委員会の承認を得ておこなっている。

インフォーマントの概要を以下に示す。この調査の特徴として、現役で開教使をつとめる者だけでなく、リタイアした元開教使とその配偶者にもインタビューをおこなった点が挙げられる。これによって、戦後の日系移民社会における本派本願寺の開教の様子をうかがい知ることが可能になるだろう。インフォーマントは14組21名であった。現役の開教使とその配偶者5組10名、既婚であるが配偶者が都合によりインタビューに参加でなかった現役開教使4名、リタイア済の元開教使とその配偶者2組4名、未婚の現役開教使3名であった。さらに既婚の開教使夫婦11組の内訳は、夫婦ともに日本人（アメリカに帰化した者を含む）の開教使夫婦は5組、日系人開教使と日本人配偶者は2組、日本人開教使と非日本人配偶者は2組、日系人開教使と非日本人配偶者の夫婦が2組となった⁸⁾。開教初期と比べ開教使もその配偶者も多様化が見られる。既婚の現役開教使とその配偶者の年齢は30代から60代までと幅広く、未婚の現役開教使は20代後半から30代であった。リタイア済開教使の夫婦は70代であった。なお、この調査においては開教使はすべて男性であった。

以上の基本情報を踏まえながら、本稿の目的に沿って開教使とその配偶者の役割や活

動が地域コミュニティとどのように関連しているのかをインタビュー内容の分析によって検討していこう。

4-2. ハワイ寺院の活動と教化組織団体

ハワイの諸寺院での活動を見ておこう。日曜礼拝（Sunday Service）はハワイのどの寺院にとっても重要な活動であり、教えを伝えていく場でもある。無住寺院以外の寺院では毎週日曜日に開催される⁹⁾。基本的には使用言語は英語だが、別院クラスの大規模寺院になると英語以外に日本語でのサービスがおこなわれる。また開教使は個人の葬儀・法要などももちろん執行する。これらの活動は宗教の根源的かつ宗教的意味を付与された活動であるが、ハワイ教団のばあい、宗教活動以外の教育組織やボランティア・アソシエーションの活動も非常に活発である。寺院付属の日本語学校は（その数は少なくなったものの）戦後も継続して開校しているが、それ以外にも書道、華道、柔道といった日本文化をルーツにもつ生涯学習教室を多くの寺院で開催しており、またアメリカで流行している ZUMBA というフィットネス・プログラムの教室が開催されることもある。こうした多種多様な教育機会の提供は、日本語学校を除いて、寺院の開教使ではなく実質的には寺院のメンバー（信徒）が中心になって行っているようである。開教使やその家族は一参加者として活動に加わる程度であり、気軽に交流を楽しんでいるようであった。

各寺院にはメンバーの教化組織として仏教婦人会（BWA : Buddhist Women's Association）や仏教青年会（YBA : Youth Buddhist Association）などがあり、とくに仏教婦人会は多くの寺院で組織されている。仏教婦人会は女性メンバーを中心としたボランティア・アソシエーションであり、バザーやガレージセールといった寄付金を募るための活動や、プロジェクト・ダーナという高齢者・障害者への福祉ボランティア活動の中核的存在である。筆者も参加した寺院の開催する敬老の日のイベントにおいては、仏教婦人会メンバーが手作りした食事が振る舞われるなど、寺院行事へも多分にコミットメントしている。ハワイにおける仏教教団のボランティア活動は、仏教婦人会が中心となっておこなっているといつてよいだろう。実際に開教使からは『宗教団体のボランティアが活発なのはアメリカ社会の特徴だけど、それを支えているのは仏教婦人会のメンバーたち』だという語りが得られている。こうした仏教婦人会の活動に対して、開教使や開教使の配偶者が積極的にかかわることは少ない。筆者が参加したバザーにおいては、その最中に開教使夫婦が少し顔を出し挨拶を交わす程度で、活動自体をメンバーたちと一緒にこなう様子はあまり見られなかった。もちろん開教使の妻や女性開教使がメンバーとともに仏教婦人会の活動を盛り上げることはあっても、彼女らが主導して動かしていくことは、現代のハワイ教団においてはほとんどないといえる。

4-3. 開教使の配偶者の役割

それでは、ハワイ教団における開教使の配偶者は何をおこなっているのだろうか。イ

ンタビューをおこなったところ、時代変化と明確な関連がみられることが分かった。

リタイア済の開教使の配偶者 2 名に対し、開教時代についての仕事をたずねたところ、いずれも日本語学校の講師をしていたという答えが返ってきた。リタイア済の開教使も当時の妻の日本語学校の仕事を振り返り、高い評価をおこなっていた。

日本語学校があったので、坊守がそこで教えるということはあったけど、外に出てはたらくということはなかった＜配偶者・女性＞

それ（日本語学校の講師としてはたらくこと）が当たり前だと思ってました。＜配偶者・女性＞

奥さんが日本語学校をやるのはと一っつも助かったよ、本当に。＜元開教使・男性＞

これらの語りからも分かる通り、開教使も配偶者自身も、寺院の関係組織である日本語学校に開教使の配偶者が勤めることが当然のこととして受け入れられていたのである。この傾向は戦前の開教初期の頃からの潮流をくんでいると見られる。開教初期の開教使とその配偶者は日本国出身で日本語能力を備えた者たちであったことから、寺院付属の日本語学校で日系 2 世たちに日本語を教える需要に対して最適な人材であったのである。もちろん、日本語学校の講師の合間にも来客の接待やメンバーとの交流をおこない、日曜日は日曜礼拝への参加もおこなうことが開教使の配偶者には求められていたし、配偶者たち自身もそれを受容していたのである。

しかし時代変化にともない、それまで日本人のみで形成された開教使やその配偶者のエスニシティに多様性が生まれてきた。日系 2 世・3 世開教使や、非日本人の配偶者の誕生である。また、メンバーたちの世代交代も進み日系 3 世・4 世メンバーが増えるに従い、ホスト社会＝アメリカ的価値観を持つメンバーも増えてきた。こうした時代変化にともなう開教使夫婦のエスニシティの多様化は、開教使の配偶者の役割をも変容させてきた。インフォーマントの現役開教使の日本人妻は、開教使が所属する寺院の事（寺）務にかかわる仕事や関連組織での職員の仕事をする者もいたが、それに対してメンバーからある疑問が投げかけられるのだという。

メンバーの人から「先生（開教使のこと）は開教使だけど、じゃああなたは仕事はどうするの？」って聞かれるんですよ。はたらきに出ることが普通になってきている＜配偶者・女性＞

（はたらきに出ることについて）よく聞かれますし、他の奥さんたちも言われてるみたいですわね。（私は）今はこの仕事（寺院の事務スタッフ）があるからいいけど、「次の仕事はどうするのか」みたいなことは…＜配偶者・女性＞

開教使の妻もはたらくべきだという考えがメンバーの中に共有されており、メンバー

の側から開教使の妻に対し自由な就労を勧めている空気を、開教使の配偶者たち自身を感じ取っていることが分かる。しかし、彼女らは自身の就労を寺院外に積極的に求めることはしない。その理由を日本人妻たちはこのように述べている。

仕事をするにしてもやっぱり、日曜日にサービスに出られるような仕事でない…。
そう思うと結局、(寺院関係の)日本語学校とかの講師に、ってなってしまう。＜配偶者・女性＞

(はたらくことは) 難しいよね、やっぱり。子どももいるし、お寺も手伝わないとって思うし。＜配偶者・女性＞

この語りからは、日本人配偶者たちは、開教使の家族として寺院の行事を手伝い、日曜礼拝などの行事に参加するべきであると考えており、開教使家族としての役割の規範と、メンバーからの就労を勧める声との間で悩む姿が明らかになった。

一方で、寺院には全く関係のない民間企業等に勤めている開教使の配偶者も存在していた。多くは仕事の関係でインタビューが叶わなかったが、開教使へのインタビューから、日本出身でない女性であることが分かった。彼女たちは教員であったり、福祉サービス業であったりと職種はさまざまであったが、いずれもフルタイムの仕事をもっていることがほとんどであった。こうした日本人でない配偶者は、「開教使の家族としての規範」の意識は希薄で、開教使の側も配偶者に対して寺院活動への参与はあまり求めている。開教使夫婦の間である程度経済的に自立した関係を築いていることがうかがえる。しかしながら彼女らが寺院の活動に全くかかわらないというわけではなく、非日本人配偶者のうち数名は仕事の時間の合間を縫って寺院行事やボランティア活動に顔を出していることが分かっている。

教団制度や宗教文化の現地化・アメリカ化を進めていった本派本願寺ハワイ教団は、開教使の役割をも変容させていった。日本の住職と坊守の関係をそのままハワイの開教使夫婦の関係にあてはめていた開教初期から近代までとは異なり、夫婦間の自立した関係を支持する価値観がメンバーにも波及した。日本人配偶者は、そうしたメンバーの価値観を認識しながらも、開教使の配偶者としての役割の遂行を優先したい・優先すべきであるとの規範や希望を有しており、そうした認識のズレに葛藤している日本人配偶者の姿が明らかになった。

5. まとめ

本稿では、日系宗教のうちハワイで最大の教勢を誇る本派本願寺を対象とし、開教使家族の役割と教団のコミュニティとの関連を、日系宗教の現地化という点に着目し、開教初期と現代とを比較することによって検討を試みた。開教初期の開教使家族の様子を、

開教使の妻たちの手記・手紙から検討し、さらに現代の開教使夫婦へのインタビュー調査をおこなった。

開教初期においては、日本人移民に対して精神的な安寧と子どもへの教育機会、エスニック・アイデンティティの資源を提供する日系宗教・本派本願寺は、日系移民社会を維持するために重要なファクターであった。そして寺院に赴任してきた開教使家族は、メンバーにとって様々な資源を提供する寺院活動の主導者であり、日系移民社会全体の指導者でもある重要な人物であった。開教初期の開教使の妻は、日本語学校等やボランティア活動を必死にこなしていたり（菊池 1985）、仏教婦人会の顧問などの重要なポストに開教使の妻が就くことが多かった（本多 2011）。しかし現代の本派本願寺においては、アメリカ化によって理事会を敷いた信徒主導による寺院運営がなされており、開教使の寺院での地位は開教初期と比べると強い権限は持たず、仏教婦人会などメンバーによって形成された下部組織が寺院活動のさまざまな側面に貢献していることが示された。これに伴い、現代の開教使夫婦の役割は、開教初期に比べて縮小していったことが分かる。アメリカ化によって教団は信徒中心の運営形態になり、さらに信徒から発生してきたボランティア・アソシエーションが活発に活動しているという点を見ると、もはや開教使夫妻はそれらを主導する立場にはなく、彼らの重要な役割は宗教活動・宗教儀礼を執行し、教義を伝え広めていくことへと縮小していったと表現できる。

こうした信徒支配型の寺院においては、寺院メンバーのコミュニティの維持が開教使家族のコミュニティへの参与によってなされるわけではない。現代ではもはや寺院を中心とした活動は信徒主導でおこなわれているものが大半であり、それは開教使が転任し新しい開教使がやってきても大きな変化なくおこなわれていることから分かる通りである。ハワイにおける寺院メンバーのコミュニティは、開教使家族の性格や活動の度合いによって結びつけられているのではなく、信徒支配型の寺院運営によって維持されてきたといえる。

信者中心の寺院運営は、日系宗教のアメリカ化によって出現した新たな寺院の形態であった。本派本願寺においてもアメリカ化が進み、寺院はメンバー（信徒）によって構成された理事会によって運営されていた。こうした寺院運営のあり方は、メンバーの発言力を高めてきた。さらに、アメリカ化・現地化と世代交代の効果によって、メンバーらの価値観も変化し多様化していった。開教初期は、開教使の配偶者は日本語学校などの講師をすることが当然のように考えられていたが、現在では開教使の配偶者は寺院外での就労先を見つけ、夫婦自立した関係を築くことが良いとする価値観をメンバーがもっているようである。ホスト社会アメリカの文化・価値観をメンバーが受容し、女性が労働について自由な選択が可能になったという点は望ましいものと評価される。しかし、日本人配偶者にとって寺院の外ではたらくことは「開教使の配偶者」として寺院活動に参加できなくなるのではないかという懸念材料となっているのである。女性の自由な職業選択・社会進出という望ましい状況と、「開教使の配偶者としての役割」観念との

はざままで、日本人配偶者たちは葛藤を高めている。主体的に仏教へとかかわっていきたいと思い、仏教にかかわることを選択した開教使配偶者の存在を、ハワイ教団がどのように包摂していくのかが問われている。

付記

本研究でおこなった調査は、『卓越した大学院拠点形成支援補助金「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」平成25年度大学院生調査研究助成』の助成を受けたものです。調査に協力いただいた本派本願寺ハワイ教団の関係者の方々に感謝いたします。

注

- 1) 本項の日本人移民と宗教の歴史については、とくに出典のないものは『海を渡った日本宗教—移民社会の内と外—』（井上 1985）に基づいている。
- 2) 護持会員以外で浄土真宗に協力する者、または理解を示す者のことを指す。
- 3) 日本国内の浄土真宗本願寺派寺院では「門徒総代」という諮問機関を置く制度がある。門信徒の中から複数名の門徒総代を住職が委嘱する。門徒総代は住職を補佐して、寺門の護持発展に努め、その諮問に応じて意見する役割を負う。なお、日本の宗教法人法 第 18 条においては、宗教法人に責任役員を 3 人以上置くことが決められており、さらにこの責任役員のうち 1 人を代表役員とすることを定めている。浄土真宗本願寺派寺院においては、門信徒の代表者として門徒総代を複数名選出する。住職が代表役員、坊守が責任役員のうち 1 席を担い、残りの責任役員を門徒総代の総代長が兼ねることが多く、住職と門徒総代の両方が寺院運営に関わる形態をとる。
- 4) 浄土真宗本願寺派が 2015 年におこなった第 10 回宗勢基本調査では、住職の平均年齢は 65 歳であった（第 10 回宗勢基本調査実施センター 2016）。
- 5) 1920 年の大卒初任給は 40 円、勤労者平均月給は 115 円、平均年収は 583 円（週刊朝日編 1988）なので、渡航費がいかに高額かを推し量ることができる。
- 6) 日本語学校の授業時間は学校によって異なるが、菊池のばあいは朝・昼・夜にそれぞれ 1 ～ 2 時間ほどおこなっていたようである。土曜日はさらに授業数は多くなる。
- 7) 戒厳令が出されたハワイにおいては、日系移民社会の教育機能であった日本語学校も閉鎖を余儀なくされた。その後、ハワイの日系移民に対する厳戒態勢が緩和され、日本語学校やサンデースクール（日曜学校）の再開の許可が下りる。菊池しげをは、菊池開教使が帰還するまで、再開に向けた人材確保や場所の確保などに奔走していた。
- 8) ここでいう日系人は混血を含む日系 2 世・3 世のひとびとを指す。また非日本人は、白人など日本国で生まれ育っていないひとびとのことを指し、ハワイで生まれ育った日系人も含む。
- 9) 無住寺院では月に 1 回程度のペースで開教使が訪れ、法話会などが開催されているようである。

文献表

- 第10回宗勢基本調査実施センター編 (2016),『第10回宗勢基本調査報告書(教区別集計)』
 本多彩 (2011),『アメリカの仏教婦人会』, 女性と仏教 東海・関東ネットワーク編『新・
 仏教とジェンダー—女性たちの挑戦』 梨の木舎, 293-309.
- 井上順孝 (1985),『海を渡った日本宗教—移民社会の内と外—』 弘文堂.
- 浄土真宗本願寺派 (2016),『平成 28 年度版 宗勢要覧』 (非売品)
- 開教 (海外布教) 研究班 (2000),「浄土宗ハワイ開教研究調査概要報告 (その二) ハワイ
 における日系宗教の現状」『教化研究』 11: 2-62.
- 菊池しげを (1985),『開教初期の思い出』 永田文昌堂.
- Kimura, Yukiko (1988), *Issei: Japanese Immigrant in Hawaii*, Honolulu: University of
 Hawaii Press.
- Mutual Publishing (2012), *Hawaii State Data book*, Mutual Publishing.
- 中牧弘允 (1989),『日本宗教と日系宗教の研究—日本・アメリカ・ブラジル』 刀水書房.
- 中野毅 (1981),「ハワイ日系教団の形成と変容—本派本願寺教団と日系コミュニティ」『宗
 教研究』 55(1): 45-72.
- Pew Research Center (2014), “*Religious Landscape Study*” (2017 年 9 月 30 日取得, [http://
 www.pewforum.org/religious-landscape-study/](http://www.pewforum.org/religious-landscape-study/))
- 貞包哲朗編 (2004),『ハワイ開教使 若き妻の信と愛: 開教使夫人の手紙』 探究社
- 高橋典史 (2014),『移民、宗教、故国—近現代ハワイにおける日系宗教の経験』 ハーベ
 スト社

Transformation of the Role of Minister Couples in Hawaiian Society: Focus on Americanization of the System of Japanese Religious Organization

Momoko YOKOI

In this article, I focus on Honpa-Hongwanji, the largest Japanese Buddhist school in Hawaii, and reveal the relationship between the roles of minister couples and religious communities by focusing on the Americanization of Japanese religion. For this purpose, I explored the activities of minister couples by examining letters of ministers' wives in the early days of missionary work, and conducted an interview survey on seven minister couples and seven ministers in contemporary Hawaii society.

In the early days of missionary work, Honpa-Hongwanji, which provides spiritual wellbeing, educational opportunities for children, and resources pertaining to ethnic identity to Japanese immigrants, was important in maintaining Japanese immigrant society. Furthermore, minister couples were important, because they were leaders of temple activities and provided various resources to religious members, and leaders of Japanese immigrant society. Ministers' wives lectured at the Japanese language school and participated in volunteer activities, or were advisors at the Buddhist Women's Association.

However, in contemporary Hawaii, as a result of Americanization, the board of directors was organized and the temple operated mainly by believers in Honpa-Hongwanji. Furthermore, sub-organizations formed by members such as the Buddhist Women's Association contributed to temple activities, for example by participating in the charity bazaar and garage sale, welfare volunteer activities for people in need, and lifelong learning programs. Accordingly, the roles of minister couples in contemporary Hawaii have diminished compared to the early days of missionary work. They are no longer in the position to lead volunteer activities, and their important role is now limited to executing religious ceremonies and activities at temples and spreading doctrines.

In the early days of missionary work, minister couples and temple members considered ministers' wives as suitable to lecture at the Japanese language school. However, now, temple members think that ministers' spouses should rather work outside the temple. Although it is desirable as a contemporary value that women make free choices about labor, Japanese wives are concerned that they will not be able to participate in temple activities as ministers' wives if they work outside the temple.

Increasingly, Japanese wives are experiencing conflicts between women's social advancement and the idea of their roles as ministers' wives. It is questioned how the Honpa-Hongwanji will subsume those who want to engage in and select Buddhism subjectively.